

株式会社オーケーエム 代表取締役社長 奥村 恵一氏

interviewer 頭取 高橋 祥二郎 桜川支店長 山本 茂喜

バルブのことなら一番に声をかけてもらえる。「ファーストコールカンパニー」を目指す。

流体の流れ方や流量を制御するバルブ。さまざまな分野に使われ、シンプルな構造だが、奥が深い製品だ。バタフライバルブ国内トップクラスの株式会社オーケーエムは、世界の顧客ニーズに応えるため、バルブの進化に挑戦し続ける。



株式会社オーケーエム 代表取締役社長 奥村 恵一(おくむら・けいいち)氏

1961年生まれ。83年、明治学院大学経済学部を卒業して株式会社奥村製作所に入社。90年に工場長としてオーケーエムバルブマレーシアに赴任し、98年に同社社長に就任。その後、株式会社オーケーエム常務取締役国際本部長、常務取締役生産統括本部長等を経て、2013年に代表取締役社長に就任。滋賀バルブ協同組合理事、滋賀県経済産業協会理事、滋賀県立大学工学部支援会監事を務める。

バルブ専門メーカーとして国内トップクラスの事業規模を誇る

高橋 株式会社オーケーエムさんは、滋賀を代表するバルブ専門メーカーです。バルブ製造は、国内唯一かつ滋賀県内最大規模の地場産業として知られていますが、そもそもバルブとは、どのような役割があるのでしょうか。

奥村 バルブの役割は、流体、つまり流れるものをコントロールすることです。バルブは、構造によって玉形弁や仕切り弁など、さまざまなタイプに分類されます。その中で、私どもが最も得意とするのはバタフライ弁というバルブで、円盤状の弁体を回転させ、流体を止める、流す、絞

弁体を本体に取り付けるバルブの加工工程。右から奥村恵一社長、高橋頭取、山本支店長

ることをします。他の型式のバルブに比べ、口径が大きくなるほど重量が軽くなり、省スペースの配管が可能です。水はもちろん、海水や油、空気、ガスなどほとんどの流体を制御。当社では口径40mmから2400mmまでのバタフライ弁を製造しています。他にも、板で開閉を制御するギロチンのような構造のナイフゲート弁、ゴム製チューブで流体を締め切るピンチ弁など多様なバルブを製造しており、バルブ専門メーカーとして国内トップクラスの事業規模を確保しています。

高橋 売り上げの約2割が船舶、造船所向けですが、船のどのような場所に設置されているのでしょうか。

奥村 オイルタンカーが港湾で原油を積み下ろす際、油槽が空になると船体が傾くので、バラストタンクに海水を注水してバランスを保ちます。そのタンクに注水、排水の制御をするバルブが船舶向けの代表的なものです。面白いものは、バタフライ弁の変種で「角形バタフライ弁」があります。以前は、セメント運搬船の角形ダクトにゲート弁を用いましたが、100%密封が不可能でした。それを角型バタフライ弁に変えることで密封が可能となり、万が一船腹に穴が開いても沈没の心配なく、安全に航行できるようにになりました。通常は円盤状の

弁体のバルブをバタフライ弁と言いますが、四角い弁体構造の角型バタフライ弁を開発しました。

山本 御社のバルブが制御できる流体には、粉体や特殊な流体もあるのですね。

さまざまなスラリー液や粉体など扱いが難しい流体もスムーズに制御

奥村 セメントのほか、コピー機のトナーなどの粉体や、どろどろしたスラリー流体などの腐食性、摩耗性をもつ特殊な流体も当社は得意としています。1952年からバルブ製造に乗り出した父の奥村清一名誉会長の代には、製

紙工場設備向けのバルブを得意としていた時期がありました。バルブ液のような詰まりやすいスラリー状の液を巧みに操る制御弁の実績経験を多く積むことで、他社が不得手とする扱いにくい流体でも、しっかりとコントロールできる技術を身に付けることができました。

高橋 御社のバルブは、主力の船舶・造船所向け以外にも、ビル空調や食品工場、発電所など、幅広い用途に使われていますね。

奥村 ビルの空調設備では、大阪・あべのハルカスや東京・六本木ヒルズなどの超高層ビルへの納入実績も多数あります。発電所向けの代表的な事例では、中



造船所、一般工業、ビル空調等、さまざまな分野に使われる各種バタフライバルブ

東・ドバイの大型プロジェクトのタービン冷却用に、バタフライバルブを納入しました。食品工場では粉体に強いナイフゲート弁が活躍、ピンチ弁は、スラリー流体等に多く使用されています。

高橋 液晶生産が日本の家電を牽引していた時期には、当時のトップメーカーの基幹工場に多くのバルブを納入されていたそうですね。

奥村 扱いが難しい流体を制御するバルブ技術で特殊品の需要を引き寄せ、「ニッチ市場に強い体質」を作りました。一方で、安定経営のため、市場の主流製品を開拓しようと、液晶分野に注力した時期がありました。現在、市場は海外



キャピテーション(空洞現象)を検証する実験設備

にシフトし中国で活発な動きを見せています。当社の海外展開を考えると今後も重要なターゲットになるでしょう。

高橋 海外市場にも早期から目を向けてこられました。70年代から80年代にかけて、商社を介して、蒸気やスラリー液などを制御するゲート弁を旧ソビエト連邦へ大量に輸出されていたそうですね。

「短納期でカスタマイズ製品を」 苦労を重ねた海外進出で実現した

奥村 旧ソ連向け製品では、高温高圧、厳しい腐食、摩耗性流体など困難な条件にも応えなくてはなりません。当社で開発技術を育てるためにはよい経験を積むことができました。また、国境を越えて事業を展開する勇氣と広い視野を与えてくれました。これが90年のマレーシア進出につながりました。

高橋 米国メーカーとOEM契約をし、海外への輸出を目的に設立された現地法人ですね。ところがその会社は間もなく倒産。当時、マレーシア法人の社長だった奥村芳征氏(奥村社長の叔父)がASEAN諸国へ進出していた日系の家電工場(空調設備)及び半導体工場等メーカーに懸命に営業をかけられ、危機を脱したとお聞きしています。

奥村 叔父の貢献は本当にすばらしいものでした。ところが、現地で生産する製品の品質が向上せず、今度は私が10年間ほど現地に駐在。日本流の「ものづくりの技と心」を共有してもらったために地道な努力を重ねました。英語や日本語が読めない従業員のために写真を使ったマニュアルを作ったり、中間管理職のやる気を高めようと特別賞与を設けたり、現地での操業は、日本での感覚とは違った逸話がたくさんあります。

高橋 文化や仕事に対する意識が異なる外国で、日本国内と同様の製品を作ろうとすると、大変な苦労があるとお聞きします。奥村社長にとって、その10年間はまさに試練の日々だったことでしょうか。

奥村 97年のアジア通貨危機では最大の苦労を味わいました。当時マレーシア法人からの輸出比率が高かったインドの水没状況下で240時間の確実な動作を保証しています。

「五方よし」を大切に 喜ばれるバルブの製造に挑む

高橋 バルブに関するのなら、一番に声をかけてもらえる。そんな「ファーストコールカンパニー」を目指しておられるそうですね。

奥村 お客さまから一番に声をかけていただき、お客さまが求める装置やシステムに最適なバルブを共同で開発することが、今後の進む道だと考えています。また、近江商人の「三方よし」に加えて、先代から提唱の、バルブを使われる方の高い満足度「使い手よし」、それを開発・製造する私たちが社会貢献できる「創り手よし」の「五方よし」を大切に、今後もお客さまに喜ばれるバルブの製造に

ネシアの通貨が暴落。販売を確保するため、暴徒があふれる現地へ赴いた際は生命の危険さえ感じました。資金力のない私たち中小企業の海外展開では、思いも寄らないリスクに前途を塞がれます。それでも、勇気をもって海を越えてよかつた、今はそう思います。現在の当社最大の強みである、「海外生産の標準品をベースに国内でカスタマイズ製品にし、短納期を実現する」というモデルの二翼を海外拠点で担う契機となりました。

山本 そのモデル、もう少し詳しく教えてください。

最適を追求し続ける開発力 高温弁や重防水バルブで花開く

奥村 我々のバルブの基本構造は本体、弁体、シートリング等で構成されています。この基本の標準規格品でも多様な用途、



同社製品が生まれる技術研究所内の配管設備

精励してまいります。

高橋 この度、御社の歴史資料館が完成したそうですね。

奥村 当社へお越しになるお客さまに、当社の歴史と製品開発・製造の流れをご覧いただきたいとの思いで、名誉会長の奥村清一が開設しました。曾祖父が明治35(1902)年に創設した鋸製造所の鋸から現在製造する最新のバルブまで各種製品を陳列しています。

高橋 御社の歴史が濃縮された空間ですね。大変興味深いです。最後になりましたが、当社のCSR私募債「つながり」を滋賀県立大学さんへの寄贈品にご活用いただき、ありがとうございます。

奥村 当社には叔父の奥村政信最高顧問をはじめ滋賀県立大学OBが在籍しています。ご縁も深く、機械システム工学科3回生の皆さんを当社へお招きし

材質や表面処理などに対応できるようにしています。マレーシア法人と2003年に設立した中国蘇州の現地法人では標準規格品をメインに、多種多様なバルブを製造します。そのバルブを日本の本社工場に持ち込み、流体をコントロールする電動駆動部や空気シリンダー駆動部を搭載組み立てし、自動制御弁として完成させます。こうすることで、お客さまが求める用途・条件に細やかに対応できるカスタマイズ製品が短納期で提供できます。このモデルがあったからこそ、国内トップクラスの事業規模を確保できました。

高橋 ご苦労を重ねて海外展開されたからこそ、得られた実りだと思えます。ところで、製品開発にはどのように取り組まれているのですか。

奥村 「お客さまのこの装置にはどんなバルブが必要か」の問いかけに、装置やシステムの開発段階からお客さまと二人三脚で取り組む道を目指しています。例えば、ビル空調向けの静音設計バルブもそんな考え方から生まれたものです。騒音の元となる流体を引き起こすキャピテーション(空洞現象)を抑えられるよう、弁体の形状を変えることで実現しました。配管内の静音にも貢献できたと思います。

高橋 500℃もの高温に耐えられる「高温弁」、マイナス196℃の超低温の



歴史資料館で奥村清一名誉会長(左)からバルブ専門メーカーへの道のりを聞く

て、ものづくりの最前線に接していただいたことでもあります。

高橋 県内の学生さんに「滋賀にこんな素晴らしい企業があったのか」と気づいてもらえる機会を、私たちみんなでもっと増やしていきたいと思えます。本日はありがとうございます。

社 是

- 一、 独創的な技術。
- 二、 最高の品質、最低の資源消費。
- 三、 余裕のある生活と豊かな心。
- 四、 地域社会に貢献する。

会社概要

株式会社オーケーエム

- 本社/滋賀県蒲生郡日野町大谷446-1
- 資本金/4億5,400万円
- 従業員数/180名
- 事業内容/バタフライバルブ・ピンチバルブ・ナイフゲートバルブ・電子制御バルブ・ウェハーチェッキバルブ・その他特殊バルブの開発・製造・販売
- URL/http://www.okm-net.co.jp/

沿革

- 1902年 奥村清太郎氏が鋸製造所を創設
- 1952年 バルブコック専門工場に転換
- 1962年 株式会社奥村製作所に社名変更
- 1969年 日野町に本社工場を移転
- 1990年 オーケーエムバルブマレーシアを設立
- 1993年 株式会社オーケーエムに社名変更
- 1997年 ISO9001を認証取得
- 2003年 中国に蘇州奥村閥門有限公司を設立
- 2010年 日本海事協会認定事業所に登録

